
女の口説き方

浅井 健二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女の口説き方

【Nコード】

N0880I

【作者名】

浅井 健二

【あらすじ】

田所さんはむちゃくちゃに性格が悪い。今日も僕は田所さんの命令でジョルトコーラを買いに行く（コカコーラでもペプシコーラでもなくジョルトコーラですよ）しかし、そんな田所さんであるが、意外な人望がある。なぜなら、恋愛相談に乗るのが異様にうまいからだ。今日も、田所さんの元へは恋愛に悩んで、先っぽから我慢汁をしたたらせた子羊たちが足しげく通ってくる。そして、田所さんのアドバイスを受けて、股間をパンパンに膨らませて帰っていく。

プロローグ

プロローグ

僕は哲学者になりたい。

17歳とか18歳の頃、わりと真剣にそんなことを考えていた。

今思うとアホとしか言いようがないが、あのころはそれなりに純粹で、かつ必死で、かつ「ソフィーの世界」なんかを読んだばかりだったのだらう。

ならば哲学者とはいかなるものか？

昼間っから酒を飲み、テレビでワイドショーを見たり、外をぶらついて、近所の主婦に「俺は哲学者だぞ。このやろう」と言っている、それはまあ、広い意味では哲学者なのかもしれないが、僕がなろうとした哲学者はもっとちゃんとした哲学者だ。

白いシャツの上に黒いカーディガンなんかをひっかけて、哲学書を片手に大学の講堂で抗議をし、女子学生に「先生、ちょっとわからないことがあるんです。この後お時間があれば私のマンションまで来て教えてくれませんか」「うむ。まあ、いいだらう。君はひとり暮らしかね？」と黒ぶちフレーム眼鏡を右手の中指でくいとあげるような、そんな立派な学問探究の徒である。

哲学者になるためにはどうすればいいか？

熟考の末に僕が出した結論は哲学科のある東京の大学に進学す

ることである。

人一倍勉強熱心な僕は、高校卒業後、高校で習う内容をさらに1年間自主的に勉強し、満を持して東京の大学へ通うこととなった。ただ、ひとつ断っておくが僕が哲学者を目指したことはこの後のストーリー展開には全く関係がない。

ようするに僕は東京で暮らす大学生だと言いたかったただけだ。

1・21歳の頃の僕について

1・21歳、大学3年生の僕について

21歳の頃。僕はジョルトコーラを買いに自転車走らせていた。(コカコーラでもペプシコーラでもなくジョルトコーラですよ)僕の生活する学生寮の半径5キロ以内でジョルトコーラが買えるところはひとつしかない。

豊島区にあるマンション「南池袋パークタワー」の1Fロビーに設置してある自動販売機だけだ。

自動販売機ベンダーのくそバカやろうか、それとも飲料メーカーに文句を言えはいいのか？

とにかく誰が腐れ脳みそなのかははっきりしないが、やつらは自動販売機をオートロックの自動ドアの内側に設置しやがった。

おかげで、ジョルトコーラを買うためには、マンション住民もしくは関係者の出入りによって自動ドアが開くのを待たなければならぬ。

時には1時間待つこともある。

寒風に震えながら奥歯をガチガチ言わせることも、夏の暑さにTシャツを汗でベツトリさせて待つこともある。

そして、人の出入りによって自動ドアが開いたとしてもマンションの中へ入るのは、至難の業だ。

なんせ僕はマンション住人でもなければ、宅配業者でもない。ダスキンを売りに来たセールスマンですらない。

ただ、文京区から自転車を走らせてジョルトコーラを買いにきた大学生である。

ドアが開いた瞬間に、目にも見えない速さでシュパッとマンション

内にすべり込めばいいと思うかもしれないが、人間はそんなには早く動けないものである。

やってみればわかるが、どうしても相手の視界に入ってしまう。で、あればイシコロぼうしでもかぶって全く人の注意を惹きつけないようにできればいいのであるが、これまた現実的には難しい。

またオートロックのカギを開けてマンションへ入ろうとするOLさんの後ろにぴったりとくっついてドアを潜ろうものなら「ギャー」。この人痴漢よ。大量殺人犯よ。管理人さん。お巡りさん。山本課長達也。誰か助けに来てー。ギャー」と大声を出され、一晚留置場で過ごす羽目になるとも限らない。

じゃあ、「すいません。カギを部屋の中に忘れちゃって。はは」とマンションの住人であるかのように装い、怪しまれないよう偽装するという手もあるが、そうすると、マンションの住人であることを装った手前、いつまでも1Fロビーでもたもたしているわけにはいかず、かたち上エレベーターに乗り込み、どこかのフロアで降りないといけないし、万が一、どの部屋に誰が住んでいるかを把握している住人がいた場合は、「ギャー。泥棒だ。強盗だ。強姦魔だ。ギャー」と騒がれ、やっぱり一晚留置場で過ごさなければならぬ危険が出てくる。

そこで、最終的に僕が行き着いたもつとも安全な方法は、こっちの手のうちをすっかりさらしてしまうということであった。

自動ドアが他の住人、関係者の出入りによって空いた瞬間、「ジョルトコーラ」ジョルトコーラ」と口ずさみながら入っていくのである。

もちろんオリジナルソングだ。

そうすると怪しいとは思われるが、まあおそらくはジョルトコーラが好きな変わった人なんだろうとドアを開けてくれた人が悟ってくれるので比較的トラブルにはなりづらい。仮に怪しい目でじっと見られたら「いやー、ジョルトコーラはここしか売ってくれなくて。

はは」と言い、速やかにジョルトコーラを買ってマンションを後にすればいい。

ちなみに、ここまで苦勞して買うのだから、さぞ僕がジョルトコーラを好きなんだろうと思うかもしれないが、僕は正直言つてジョルトコーラが好きではない。

むしろ、世界で一番憎んでいる液体がジョルトコーラだ。核兵器と紅シヨウガと顔がイケてる男子と上級生、テスト、レポート、ジョルトコーラだけは一刻も早くこの世から消えてほしいと切に願っている。

しかし、何故そんな忌々しきジョルトコーラを必死こいて買っていくのかというと、田所さんが命令するからである。

いや、田所さんだつて別にジョルトコーラが特に好きではないはずだ。

その証拠に僕がジョルトコーラを買ってくるのを、コカコーラを飲みながら待っていたりする。

時には午後の紅茶を飲みながら待っていることすらある。

そして、僕が必死こいて買ってきたジョルトコーラを「御苦勞」と一言言い、そのまま冷蔵庫にしまう。

その時にちらりと見えるのだが、冷蔵庫の中には明らかにジョルトコーラが数本入っている。

それは明らかに僕が以前必死こいて買ってきたジョルトコーラだ。

それならば、何故わざわざ後輩にジョルトコーラを買いに行かせるのかと言うと、それこそがまさに田所さんの田所さんである所以だ。

田所さんはむちゃくちゃに性格が悪い。

喉が渴いたと思うと「喉渴かねえか？」と聞き、僕が「いや、全然大丈夫です」と言うのに構わず、小銭をチャリンと手渡し、「ジュース買ってきて。お前のぶんも買ってきていいから」少し気前のいいところを見せつつ、その1,000倍過酷な命令をくだす。後に続く言葉があのだ。俺、ジヨルトな」なのだ。

こうして、僕はいつも文京区から豊島区まで自転車を走らせてジヨルトコーラを買いに行く。

田所さんのチョイスはいつも絶妙である。

買うのにすごく苦労するが、何とか探し出して買えるくらいのものを独自の嗅覚で探し出し買いに行かせる。

なので、「そんなものはもう売っていません」などとは軽々しく口に出せない。

少し前は鉄骨飲料を買いに行かされた時もあったし、メロリーエロ―を探させられたこともあった。

「すいません。ありませんでした」などと言うと、「ちゃんと西早稲田3丁目まで探したか？」などと聞いてくる。

行ってみると売っているのである。
悔しいことに。

田所さんのジュースの旅は僕の知る限りスコールから始まり、鉄骨飲料、アンバサ、メロリーエロ―を経由して、今はジヨルトコーラに落ち着いている。

2・田所健之助という男

2・田所健之助という男

しかし、何故、そうまでして田所さんの命令を聞くのか疑問に思いかもしれない。

それもちゃんと理由がある。

まず僕の暮らす学生寮がバリバリの縦社会であるから上級生である田所さんの命令には逆らえないというのと、もうひとつは、やはり田所さん本人が恐ろしいからだ。

田所さんの命令を慣行できない場合、恐ろしいお仕置きが待っている。

以前、僕の同期村山が「なんか腹減ったな。お菓子買ってきて。お前の分も買ってきていいから」と命ぜられた。

軽く「いいですよ」と答えたものの田所さんのオーダーは「俺、8分の5チップな」というこれまた過酷なものだった。

村山は愚かにも「そんなもの売ってるわけないじゃないですか」と取り合わずに、なんとポテトチップうすしお味を買ってきた。

それ以来、村山の眠れない日々が続いた。

何か心配事があって眠れないのではなく、物理的に眠れないのである。

だいたい午前2時、村山が深い眠りに入ったところ田所さんはそっと村山の部屋に入り、村山の耳にヘッドフォンを装着してあげる。ノンレム睡眠に入った村山がより深く眠れるよう、心地よい音楽でサポートしてあげようというわけだ。

村山は洋楽が好きで、特にニルバーナにはまっていた。

ニルバーナで一番いい曲は「スメルズ・ライク・ティーン・スピリット」

独特の退廃した雰囲気、カート・コバーンのリビドーが炸裂する名曲中の名曲中だ。

村山はよくこの歌を口ずさんだり、興が乗ってくると食堂のテーブルをドラムを模して指でたたいたり、そこにならぬギターをあるかのように振る舞い、演奏する真似をしたりしていた。

村山のニルバーナに対する気持ちは痛いほど伝わってくる。

田所さんもそれがわかってるのだろう。

田所さん自らオーディオの電源を入れて、CDをセットしてあげる。そして、あらかじめボリューム調節つまみを目いっぱい右にひねった後、再生ボタンを押してあげる。

しばらく村山はう、ううんと唸りながビクンビクンと動いていたが、やがて、歌がサビに入り、感極まったのだろう。ギャーギャーと絶叫して、人間がこんなに早く動けるのかというくらい早く跳ね起きた。

音楽の力は偉大である。

それを見て、田所さんは穏やかな表情で「おやすみ」と言いドアを閉める。

そんな夜が3日間ほど続いたある日、田所さんの部屋に入るとどこで手に入れたのか大量の8分の5チップが置いてあった。

田所さんはそれをぼりぼりと食べながら漫画を読んで笑っていた。

村山の部屋からはオーディオセットが消えていた。

あんなに音楽が好きだったやつに一体何があったのだろうか？

田所さんの逸話はもちろんこれだけではない。

これは、聞いた話だが、ベトナム国旗事件というものを起こしている。

僕の暮らす学生寮は奇妙に右に傾いている。

別に建物が傾いているのではなく、戦時中の陸軍中野学校のような日本を神国とみなし、天皇陛下を生き神様とするような雰囲気があるのだ。

その中では日本国旗「日の丸」はことさら特別の意味を持つらしく、毎朝うやうやしく寮の中庭に掲揚される。

そして、田所さんが新入生の頃、上級生との間で何か争いがあったらしい。

詳細は知らないが、田所さんの態度が悪いとかの理由で、上級生に正座をさせられ説教されたと聞いている。

そのことがよつぽど腹に据えかねたのだろう。

次の日に田所さんはベトナムへ飛んだ。

成田空港から7時間だ。

そして、3日後に帰ってきて、中庭の国旗掲揚台に真紅のベトナム国旗をたかだかと掲げた。

朝、寮生および管理人が目覚めると青空にでっかいベトナム国旗がバタバタと風に靡いていた。

澄み切ったブルーの空に、真紅のベトナム国旗が泳ぐ様は、それはそれは美しかったという。

地域の住人も町に突然ベトナム国旗が掲げられ、日本がベトナムに占領されたのか？と驚き、これまで目白通りを素通りしていた右翼の街宣カーは道路に一時停止をして、寮の様子をじつと見るし、日本共産党議員が笑顔で「これは、これはどうしました？」と尋ねて来るし、ピザ屋でアルバイトをしていたベトナムからの留学生グ

エン・ド・アン・ニエン君は喜んでピザのトッピングを増やしてくれるし、まさに目白の珍事と呼ぶに相応しい事件だったらしい。田所さんは、このことで寮サイドにこっぴどく怒られたらしいが、最後には「うるせえ。ガタガタぬかすと次はカンボジアの国旗を掲げてやるぞ」と言い放ったとのことだ。

これを機に、寮サイドも、上級生も田所さんに関わるのは面倒くさくなったらしく、それ以来、田所さんはアンタツチャブルな存在として、寮の中でも、町内でも、恐れられ、面倒くさがられている。

そんな、田所さんであるが、実は意外に人望がある。

田所さんには特殊な能力があつて、それを目当てに人々が寄ってくるのだ。

その能力とは恋愛相談に乗るのが異様にうまいということだ。

男子大学生と言え、頭の中の97%くらいが女のことと占められているので、田所さんの元へはそんな恋愛に悩んで、先っぽから我慢汁をしたたかせた子羊たちが足しげく通ってくる。

そして、田所さんのアドバイスを受けて、股間をパンパンに膨らませて帰っていくのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0880i/>

女の口説き方

2010年10月9日06時14分発行